

第10回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21655>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 10, 1985-10-31. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

第10回合宿共同授業を顧みて

九州大学教養部長 立 田 清 朗

昭和60年度の九州地区国立大学間合宿共同授業は、7月12日から16日までの間、九重分校と島原分校において同時に実施された。各分校の運営、進行の責任は九州大学が九重分校、鹿児島大学が島原分校を担当し、昨年とほぼ同じスケジュールで行なわれ、全期間中事故もなく、計画通りに消化された。それぞれの関係教官および事務官のご協力に対し、主管校の責任者として深く謝意を表したい。

今回は「世界の中の日本―世紀末から21世紀へ―」という、昨年に引き続き、国際的な視野に立ち、かつ将来の日本を担う若者にふさわしい主題が選ばれた。各講義は、それぞれ担当の各大学の講師から、専門の分野を通してみた国際化への、あるいは未来への視点が明らかにされ、問題提起がなされた。しかし、教官の意図するところが、学生に充分に理解されたかは疑わしく、全体として未消化の部分も多く見られたことは残念であった。

この原因の一つは、学生が合宿授業に参加する目的と、企画する側の目的とがずれていることにあると考えられる。この企画はあくまでも共同授業が主目的であり、大学間交流は従たるものである。したがって、この授業は各大学で行なわれている授業と等価なものであり、その上、大学の閉鎖的な面を打破し、個々の大学がもつ特長を汲み上げ、大学間の格差解消を目指し、教育の質的向上を試みたものである。共同合宿授業は一年に一度しかない貴重な機会である。短期間で行なわれる共同授業中の多彩な講義の内容を理解するためには、参加学生があらかじめ配布されている講義要旨や参考図書に目を通し、勉強してくる意欲が必要であろう。ここ数年間の参加学生による感想文を読んでも、あるいは今年の合宿共同授業期間中の学生の行動を見ていても、学生はこの企画を大学間の親睦あるいは個人的な交際の機会をつくる場と考えている傾向が強いように感じられる。親睦の場であれば、それは学生が個人的に、あるいはグループで企画すればよいことである。共同合宿授業はあくまで授業が主であるから、授業を抜きにしては企画する意味が失われ、本来の目的から外れるものが主となるような企画を大学側が行なう必要はない。それでも、全員が合宿するのであるから、自由時間を活用し、有意義に過ごすことは大切なことであり、これまでも否定するつもりはない。学生が同じ大学生とはいえ、それぞれ環境の異なる他大学生と交わり、同種の悩みや問題点について真剣に語り合うのには、絶好の機会となるだろう。また各大学から専門も異なり、個人的な経験も異なる教官が集まっているので、学問上のことから、人生のこと等へ、あちらこちらで議論に花が咲くことが多く見られてもよいのではないかと思う。少なくとも、九重分校では、このような期待が満たされたとは言えない。これも現代学生の気質であろうか。

一方、我々企画する側からの反省は、事前に「講義」や「フォーラム」についての内容に関する綿密な打ち合わせが必要であったと思われる。特に、「フォーラム」については、これを導入した時から、討論に先立つ問題提起が長すぎたこと、討論の主体となる学生の問題意識の汲み上げが不十分であったことなどの反省点が挙げられていた。今回もやはり同じ傾向に落ち込んだことに対し、企画した側の責任を痛感している。フォーラム形式の授業は学生の参加が容易な授業であるとして導入されたので、今後実りあるものに育てる必要があるだろう。そのためには、問題提起の在り方は勿論、その時間と学生との討議時間間に、学生だけによる討議時間を設けることなどの工夫が必要なのかもしれない。全体のスケジュールが過密であり、授業や討論に追い廻される感もあるとの声も聞かれる。学生からも、もっと話し合いの時間が欲しいとか、学生の自主的な企画が欲しいとの要望もあり、全体のスケジュールの検討も必要となるだろう。さらに、二分校制が必要か否か、初期の数年間のように一分校制に戻してはどうか、あるいは一分校の学生数80名が適切であるか否か等の根本的な問題もある。

来年度の合宿共同授業は、琉球大学のお世話で沖縄地区にて開催される予定である。合宿共同授業は、当初からこれ迄、九重や島原を中心に開かれてきた。この10年間に創成期とすれば、これから成熟期の第一歩を踏み出すわけであり、その初年度、第11回に初めて沖縄の地が選ばれることは、これまでの沖縄の歴史を振り返りても意義深いものと言えよう。しかし、多くの問題点も予想されるが、これ迄の反省点を含め、教官、事務官および学生共々一体となって努力し、克服すれば、共同合宿授業の名にふさわしい成果が挙げられるものと信じている（主管校・九重分校長）。

鹿児島大学教養部長 荒川 讓

昭和60年度の九州地区国立大学間合宿共同授業は7月12日から16日まで、二分校方式によって実施され、鹿児島大学は島原分校の当番校としてこの企画に参加する機会を得た。初回から参加しながら今回初めて運営を担当して、10年近くも継続されてきた実績という歴史の重みを再認識するとともにこの企画を発足させ、支えてきた各大学の努力と熱意に敬意の念を深くせざるを得ない。

合宿共同授業の意義は、毎回の実施要項の冒頭に掲げてある「目的」の文言が一貫して不変であることに象徴的に表われていると思われる。現在、教養部もしくは教養課程の教育が直面している問題状況として多人数教育による人間的交流の稀薄化、大学の社会的機能の変化とそれに敏感に反応する若者の学習意識の変化などが挙げられる。制度や社会意識に遠因を持つ問題性であるとすればその根本的な克服は早急には望むべくもないし、大学の力量だけに帰せられない面もある。それでも大学は教育条件改善の要求に並行して、現状での自主的な教育改革の努力を幾多となく行なってきた。個別の大学の枠を越える試みという点で合宿共同授業は極めてユニークな性格を持っており、キャン

パスの日常で求めるものを捉え切れぬもどかしさに悩む学生諸君の胸に響く内容を含んでいるのだろう。参加者の生き生きとした姿とか、参加までのためらいや冷めた気分にもかかわらずに満足感（その内容は問わぬとして）を示しているアンケート結果はその証左であり、私たちに多くの示唆を与えてくれる。

しかし、合宿共同授業の意義を高く評価するにしても、なお解決すべき多くの問題点があり、自画自讃に墮す訳にはいかない。反省点としては、各講義の総合性を高めること、学生が討議に真の意味で参加し得る条件を整備すること、交流に知的要素を更に加味して質の向上を計ること、これらを教官、学生の負担増を招かずに実現する方途を工夫することなどが挙げられる。

運営や実施上の具体的事項の反省は他に譲るとして、合宿共同授業をどう受けとめるかについて私なりの感想を記しておきたい。この企画は計画の段階から実施に至るまで、各大学や関係者が実に多くの労力と時間を費やすのに、参加し得る学生数があまりにも限られている。これの意義を認めながらも最終的な判断としてどう評価するかは意見が分れるであろう。私としては積極的に対応したいがそのためにはもっと多くの学生がこの成果を享受して然るべきだと思う。勿論、諸般の制約から規模や形式を大幅に変更し難い以上、この企画の多年に亘って積み重ねられた成果を通常の授業にどのように還元できるかが重要な課題となる。この課題に自覚的に、欲を言えば組織的に応えることになれば合宿共同授業は「特殊な授業」を超えることになるし、また新たな命が吹き込まれることになる。この困難な課題を解いて行く努力の中で、本来の目的が達成されるものと考えたい。

仁田峠で出会った旅行中の大阪の学生はこの企画に羨望の念を表していた。学部段階のある専攻分野ではこのような制度を導入するべく調査中だと聞く。私たちの共同授業が第10回という節目を迎えて、今後とも更に充実し発展するよう努力を続けたいものである。

最後に、島原分校の当番校の任務を大過なく遂行できたことについて、参加・協力を戴いた各大学の教職員各位、主管校である九州大学、貴重な御教示を戴いた前年度当番校の佐賀大学に篤く御礼を申し上げたい（島原分校長）。

1. 第10回九州地区国立大学間合宿共同授業 実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「世界の中の日本 ―世紀末から21世紀へ―」
3. 主管 九州大学教養部
4. 会場 1. 九州地区国立大学九重共同研修所
(九重分校 当番校：九州大学)
大分県玖珠郡九重町筋湯 <TEL 09737-9-2617>
2. 九州地区国立大学島原共同研修センター
(島原分校 当番校：鹿児島大学)
長崎県島原市礪石原甲1201 <TEL 09576-4-2201>
5. 開催期日 昭和60年7月12日(金)～7月16日(火)の4泊5日
6. 参加資格 九州地区国立大学に在籍する学生(教養部をもつ大学においては教養部学生)で当該大学が指定する者

7. 募集人員	九重分校 人	島原分校 人	計 人
福岡教育大学		5	5
九州大学	15	15	30
九州芸術工科大学	10		10
九州工業大学		5	5
佐賀大学	10	10	20
長崎大学		10	10
熊本大学		10	10
大分大学	10		10
宮崎大学	5		5
宮崎医科大学	5		5
鹿児島大学	5	15	20
琉球大学	20	10	30
計	80	80	160

8. 日 程 (8、9ページ)

9. 講義・フォーラム題目と講師

九重分校

講義

- | | | |
|---|--------------|-----------------|
| (1)「南極観測における日本の役割」 | 大分大学助教授 | 川野田実夫 |
| (2)「光復40周年を迎えた韓国と日本」
—学術文化交流を中心として— | 九州芸術工科大学助教授 | 大西修也 |
| (3)「生物学とその周辺」 | 九州大学教授 | 岡山繁樹 |
| (4)「マスコミと世論の関わりについて」 | RKBニュースキャスター | 三善英毅 |
| (5)「英語を使いたくない日本」 | 宮崎医科大学外国人教師 | ロバート・
J・アダムス |
| (6)「日本語と英語の音韻体系」 | 佐賀大学助教授 | 長瀬慶来 |
| (7)「日本近代文学における異文化の諸相」
—谷崎潤一郎の場合— | 琉球大学外国人教師 | デイビット・
W・フェイ |
| (8)「現代アメリカ小説における人間像」
—ジョン・スタインベックを中心として— | 大分大学助教授 | 加藤好文 |

フォーラム

- 「日本の100年 —21世紀への展望—」
- | | |
|--------------|------|
| 基調発題者：宮崎大学講師 | 宮田泰雄 |
| ：鹿児島大学講師 | 高谷紀夫 |
| 登山指導 九州大学助教授 | 吉川和利 |

島原分校

講義

- | | | |
|--------------------------------------|------------|-------------------|
| (1)「牧畜文化と日本」 | 九州大学助教授 | 小林茂 |
| (2)「アジアと日本」 | 佐賀大学助教授 | 川本芳昭 |
| (3)「日本人」
—ユニークさの神話— | 鹿児島大学外国人教師 | マーチン・
ジョージ・カウイ |
| (4)「日本における中国文化の受容」
—宋詩の題画詩を中心として— | 鹿児島大学助教授 | 大野修作 |
| (5)「西ドイツにおける市民文学の変容」
—1960年以降— | 九州工業大学助教授 | 政所利忠 |
| (6)「エネルギーと文明」 | 長崎大学教授 | 柴田昇 |
| (7)「生命科学の現状」
—いわゆるバイオ・テクノロジーについて— | 熊本大学教授 | 鈴木明郎 |
| (8)「世界の食糧と日本」 | 九州大学助教授 | 刀田和夫 |

フォーラム

- 「日本の100年 —21世紀への展望—」
- | | |
|---------------|------|
| 基調発題者：熊本大学助教授 | 櫻田一之 |
| ：琉球大学講師 | 友寄友造 |

10. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費を添えて申し込むこと。
ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。
- (2) 当該大学は分校毎の参加学生名簿及び教職員滞在計画書を6月15日(土)までに、それぞれの当番校あてに送付すること。
- (3) 参加費は、大学毎に一括して第1日目に各分校において払い込むこと。

11. 参加費（食事及び雑費）

8,500円（7月12日夕食から7月16日昼食まで）

12. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは、各大学の判断において行う。
ただし、認定することのできる単位数は2単位までとする。

13. そ の 他

- (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、登山靴又は底の厚い運動靴で履きなれたもの、登山帽、雨具(ポンチョ又はビニールカッパ)、水筒、ジーパン(女子)、体育館シューズ(島原分校のみ)、健康保険証(コピー)、日常使いなれた薬など。
- (2) 集 合 参加者は、各大学毎にまとまって、7月12日(金)午後4時30分までにそれぞれの分校に集合すること。
- (3) 解 散 7月16日(火)午後1時現地で解散するが、参加者は各大学のバスで輸送する。

第10回九州地区国立大学間合宿共同授業日程表 (九重分校)

昭和60年度

時 日	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
7月12日(金)	起	朝	講義(2) 「光復40周年 を迎えた韓国 と日本(学術中 心として)」 芸工大 大西教官	休	講義(3) 「生物学とそ の周辺」 九大 岡山教官	昼	講義(4) 「マスコミと 世論の関わり について」 RKBニスター ススキ三 善英教	休	講義(8) 「現代メリ カ小説におけ る人間像(シ ョン・スックを中 心として)」 大分大 加藤教官	自由時間 教官打合せ	自由時間 教官打合せ	夕食	夕食	夕食	自由時間	自由時間
7月13日(土)	床	食	講義(5) 「英語を使い ながら 宮崎医大 ロバート・J・ アダムス教官	休	講義(6) 「日本語と英 語の音韻体 系」 佐大 長瀬教官	食	講義(7) 「日本におけ る文化の諸相 (俳句・浮城大 文芸の場)」 大分大 W・フ エイ教官	休	講義(9) 「日本の100年 —21世紀への展望—」 基調発題者: 宮大 高谷教官 : 鹿大 高谷教官	自由時間 教官打合せ	自由時間 教官打合せ	夕食	夕食	夕食	自由時間	自由時間
7月14日(日)	起	朝	講義(1) 「南極観測に おける日本の 役割」 大分大 川野教官	休	講義(10) 「南極観測に おける日本の 役割」 大分大 川野教官	食	講義(11) 「南極観測に おける日本の 役割」 大分大 川野教官	休	講義(12) 「南極観測に おける日本の 役割」 大分大 川野教官	自由時間 教官打合せ	自由時間 教官打合せ	夕食	夕食	夕食	自由時間	自由時間
7月15日(月)	起朝	登	登山 (スポーツ)	休	登山 (スポーツ)	星	登山 (スポーツ)	休	登山 (スポーツ)	自由時間 教官打合せ	自由時間 教官打合せ	夕食	夕食	夕食	自由時間	自由時間
7月16日(火)	起	朝	全体討議	休	全体討議	昼	全体討議	休	全体討議	自由時間 教官打合せ	自由時間 教官打合せ	夕食	夕食	夕食	自由時間	自由時間

第10回九州地区国立大学間合宿共同授業日程表 (島原分校)

昭和60年度

時 日	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	消 灯 就 寝
7月12日(金)	起 床	朝 食	講義(2) 「アジアと日 本」 佐大 川本教官	休 憩	講義(3) 「日本人(ユ ニークさの神 話)」 鹿大 マーチン・ マジョーイ教官	昼 食	講義(4) 「日本におけ る中国(宋詩の 受容(宋詩を中 心として)」 鹿大 大野教官	休 憩	車中オリエンテーション	講義について の討議 I	自由 時間 教官 打合せ	夕 食	交歓夕食会	講義(1) 「牧畜文化と 日本」 九大 小林教官	自由 時間	消 灯 就 寝	
7月13日(土)	起 床	朝 食	講義(5) 「西ドイツに おける市民文 字の姿容(19 60年以降)」 九工大 政所教官	休 憩	講義(6) 「エネルギー と文明」 長大 柴田教官	昼 食	講義(7) 「生命科学の 現状(いわゆ るバイオ・テ クノロジーに ついて)」 熊大 鈴木教官	休 憩	自由 時間 教官 打合せ	講義(8) 「世界の食糧 と日本」 九大 刀田教官	自由 時間 教官 打合せ	夕 食	フォーラム形式による講義 「日本の100年 —21世紀への展望—」 基調発題者：熊大 櫻田教官 ：疏大 友寄教官	自由 時間	消 灯 就 寝		
7月14日(日)	起 床	朝 食	登 (スポーツ)	休 憩	講義(9) 「山 と文明」 長大 柴田教官	昼 食	講義(10) 「生命科学の 現状(いわゆ るバイオ・テ クノロジーに ついて)」 熊大 鈴木教官	休 憩	自由 時間 教官 打合せ	講義について の討議 II	自由 時間 教官 打合せ	夕 食	自由討議	自由 時間	消 灯 就 寝		
7月15日(月)	起 床	朝 食	登 (スポーツ)	休 憩	講義(11) 「山 と文明」 長大 柴田教官	昼 食	講義(12) 「生命科学の 現状(いわゆ るバイオ・テ クノロジーに ついて)」 熊大 鈴木教官	休 憩	自由 時間 教官 打合せ	自由討議	自由 時間 教官 打合せ	夕 食	懇 親 会	自由 時間	消 灯 就 寝		
7月16日(火)	起 床	朝 食	全体討議	休 憩	講義(13) 「山 と文明」 長大 柴田教官	昼 食	講義(14) 「生命科学の 現状(いわゆ るバイオ・テ クノロジーに ついて)」 熊大 鈴木教官	休 憩	自由 時間 教官 打合せ	自由討議	自由 時間 教官 打合せ	夕 食	懇 親 会	自由 時間	消 灯 就 寝		

2. 第10回九州地区国立大学間合宿共同授業 講義要旨

九重分校

① 南極観測における日本の役割

川野 田実夫 (大分大学)

1. 南極条約の誕生とその意義

南極条約は、1959年12月1日ワシントンで、アルゼンチン、オーストラリア、ベルギー、チリ、フランス、日本、ニュージーランド、南アフリカ、ソ連、英国および米国の12カ国で署名された。

2. 日本の南極観測の歴史

国立博物館に付設された極地研究所を日本の基地として、「宗谷」、「ふじ」、「しらせ」の観測船で南極観測が行われた経過を紹介し、日本の果たした役割を述べる。

3. 南極マクマードサウンドの自然

演者は1983—84年夏季南極観測に参加したのでその体験と南極の自然の一部をスライドで紹介する。

4. 南極をとりまく国際情勢

南極の資源、領有権の主張など、さまざまな国際問題がある。その問題と、今後の南極観測のあり方について、学生諸君と意見を交換したい。

② 光復四十周年を迎えた韓国と日本

——学術・文化交流を中心として——

大西 修也 (九州芸術工科大学)

わが国では、終戦とか戦後ということばがよく用いられるが、1945年8月15日の日本敗戦によって36年間の異民族支配から解放され民族の誇りをとりもどした朝鮮の人々にとって、今年は光復40周年を記念する意義ある年である。

わが国にとっての戦後40年は、敗戦の傷手から立ち上り未曾有の経済的繁栄と科学技術の発達を成し遂げ、再び国際社会における重要な地位を確立した年月であったかもしれない。だが朝鮮民族にとっては、解放後の民族自決の歩みとは裏腹に、領土・民族・学問等、あらゆるものが分断された状況下であり、今日もなおそうした情態が継続されているという意味で、二重に記念すべき年だったのである。今日の日韓関係は、1965年の日韓条約を基盤に、東アジアにおける自由主義陣営のパートナー的性格を徐々に強め、昨年6月には全斗煥韓国大統領の訪日を実現するに至っている。だが、経済・文化交流の現場では様々な問題がクローズアップされているのも事実で、その根底をなす異民族・異文化理解の難しさと条件について、諸君と考えてみたい。

③ 生物学とその周辺

岡 山 繁 樹 (九州大学)

本来、日本は自然科学を必要としない型の社会として発展していたのだとおもう。しかし、ある時から自己拡散性の強い西欧社会の影響で自然科学を組み込んだ社会へと転換せざるをえなかった。それ以来、日本の科学は“独創性を欠く”あるいは“模倣性が強い”などの批判をうけることが時にある。

少なくとも、生物学関連分野で独創的あるいは革命的といわれている研究も幾多の歴史的な積み重ねのうえに成立しており、模倣に始まった研究が重要な発見につながったこともある。そのような研究の幾つかと、科学の伝統のない日本でなされた独創的な研究の幾つかを紹介し、日本の科学を考える材料としたい。

もしも日本の生物学関連分野の研究で足りないものがあるとすれば、それはアイデアを実証することにかかる個人的な“より”強い情熱と勤勉 (hard work) であろう。

④ マスコミと世論の関わりについて

三 善 英 毅 (RKB毎日放送)

単なる意見が、どのようにして世論となるのか。マスコミは、どのような形で触媒の役割を果すのか。具体例を見ながら、そのメカニズムを考えてみたい。

民の声は、必ずしも天の声ではない。マスコミも、しばしば世論を盗用し、僭称する。一方人は事物をありのまま見る前にあらかじめ定義を求める。従って世論は常に健全に形成され、作用するとは限らない。要するに世論は操作され易いものでもある。

しかし、世論と政治の相互作用のサイクルが機能しない限り、代表制民主主義は成立しない。“合意による支配”をより平衡機能に保つには、どのような配慮と知恵が必要なのか……。

⑤ 英語を使いたくない日本

ロバート・J・アダムス（宮崎医科大学）

外国語として英語を習うのは、自分の文化をある程度まで捨て、別の文化を採用するという事になる。英語を使っている西洋の国々の社会には個人意識が中心である代わりに、日本社会の根本構造には集団意識が著しく強い。

集団の中には、個人差が許されていない。自国語を使う時、他人との言語力は大体同じであるが、外国語では、個人差が現れて来る。恥ずかしくて、日本人は他の日本人と一緒に英語で絶対に話さない。照れくさいばかりではなく、英語で話したら、集団の和に傷をつけるからである。

英語を使わないとけって上手にならないので、外国人が少ない日本では、日本人同士、英語で時々話しをしないといつまでも英語おんちのままに残る。

日本の集団意識を背景にして、日本人同士が、コミュニケーションとして英語を使う事が出来るかどうかと言う事を論じたいと思う。

⑥ 日本語と英語の音韻体系

長瀬 慶来（佐賀大学）

英語と対照することにより、日本語の音韻体系の持つ普遍性及び特異性の一端を考察する。母音に始まり、子音、音素配列、アクセント、イントネーション等を英語という外国語と対照することによって日本語という言葉の音声特徴を明らかにしていく。できるだけ具体的な分析データを提示し、議論してみたい。

⑦ 日本近代文学における異文化の諸相

——谷崎潤一郎の場合——

ディビッド・W・フェイ（琉球大学）

近代日本文学の作家が西洋について書いているのを読むことは、西洋の読者には大いに興味をそそられるところである。

言うまでもなく、日本文学にみられる西洋描写と西洋像は、西洋の本質について貴重なことがらを教唆してくれるが、それよりも興味深いことは、それが日本をも語ることである。

特に初期において、西洋の深い関心を払った作家の一人が谷崎潤一郎（1886～1965）であった。

本講義では関東大震災前の、いわゆる「古典回帰」初期の諸作品にみられる谷崎の西洋理解、西洋描写、西洋像を論評し、谷崎の描き出す“西洋像”が“日本”について教唆するものを、一西洋人の目を通して、探ることを中心課題とする。

⑧ 現代アメリカ小説における人間像

——ジョン・スタインベックを中心として——

加藤好文（大分大学）

移民の国であり、広大な国土を持つアメリカは様々な人種が入り乱れあるいは融け合って、錯綜した人生模様を織りなしている。それ故にこそアメリカ文学は豊潤な香を放っていると考えられる。例えばジョン・スタインベックは、祖先の系譜や彼を取り巻く生活環境に基づいて、物語を創作しエッセイを綴っている。とりわけ彼の作品の多くが生地カリフォルニアを舞台に書かれている点を見逃すわけにはいかない。そこに宿命的な因縁らしきものを想定せざるを得ないほどである。周知の通り、カリフォルニアはアメリカ各地さらに日本を始め世界各国から人々が流入し、その歴史を形成してきた州である。そして今や農業と先端工業とが共存し、日米関係を論じる際には無視できない存在であると言える。今回は、スタインベックの作品に登場する様々な人物に照準を合わせ、その行動様式を探ると共に彼らの心の本質部分に迫りたい。

○フォーラム 「日本の100年 ——21世紀への展望——」

『身近かなる異文化から世界に向けて——異文化を捉える視点——』

宮 田 泰 雄 (宮崎大学)

異文化といえば、私たちはすぐに外国文化、しかも、西洋文化を想起しがちです。大学で履修する外国語がごく少数の例を除いて、英・独・仏を中心とする西洋語であることもそのような傾向に拍車をかけているようです。しかし、近年高まりつつある西洋文明を問い直す気運は、近代西洋合理精神を絶対視するあまり、各地で豊かに展開される異文化が正当に評価されない行き過ぎを是正する気運であると考えてよいでしょう。支配的価値観の拘束からの解放こそが異文化を真に理解する第一歩と考えられますから、そのきっかけとして、まず各自が内に持っている異文化「子どもなるもの」を考察することにより、大人・近代理性人のふりかざす論理を再検討します。また最も近い外国としての朝鮮・韓国の言語を視野に入れつつ、ともすれば西洋一辺倒の傾向、あるいは自国文化を絶対視する姿勢を問い直すことによって、異文化を捉える視座を討論したく思っております。

『東南アジアを見る眼——ビルマ・フィールド・ノートから——』

高 谷 紀 夫 (鹿児島大学)

「東南アジアの多様性」が叫ばれて久しい。だが、その実相を我々はどれだけ知っているだろうか。「異文化」としてくぐることはたやすいのだが、その内容についてさほど認識を深めていないのが現状ではなかろうか。そこに介在するのは、均質性の高い日本文化の視座からくる偏見である。

昨今、現地の人々との間に起こる摩擦について日本人に反省を促す意見も少なくない。それにもかかわらず、一向に両者の心的距離が縮まったようには思われない。その理由のひとつに日本人意識の特異性が挙げられよう。それは国際的な市民意識に成長していない、他者からの評判を気にしながらもその相手の多様性を積極的に理解しようとしなない固い殻を持った自意識である。

異文化理解の出発点は、異文化を鏡にして世界的視野のもとに自文化を知ることである。フォーラムでは、ビルマ文化の諸相を紹介しながら、東南アジアの多様性について考える。

第10回九州地区国立大学間合宿共同授業参考書一覧表（九重分校）

○講義担当教官指定参考書

教官	著者名・書名・価格等
大西修也	山辺健太郎著「日韓併合小史」岩波新書 430円
岡山繁樹	渡辺正雄著「日本人と近代科学」岩波新書 430円
ロバート・J・アダムス	荒木博之著「日本人の行動様式」講談社現代新書(320) 420円
長瀬慶来	石綿敏雄著「日本語のなかの外国語」岩波新書 430円
加藤好文	佐伯彰一著「文学的アメリカ」中公新書 420円
宮田泰雄	池上嘉彦著「記号論への招待」岩波新書 430円
高谷紀夫	鳥羽欽一郎著「二つの顔の日本人—東南アジアの中で—」中公新書 500円

○推薦参考書

岡山繁樹	江上不二夫著「生命を探る」岩波新書 430円
長瀬慶来	日英語比較講座「音声と形態」大修館 2,200円
加藤好文	石川好著「カリフォルニア・ナウ」中公新書 480円
宮田泰雄	渡辺吉鎔、鈴木孝夫著「朝鮮語のすすめ」講談社現代新書 420円
吉川和利	山口他著「挑発する子どもたち」駿々堂 1,100円
	関川夏央著「ソウルの練習問題」情報センター 880円
	平宗一郎著「野の技術」岳書房 1,300円

島原分校

① 牧畜文化と日本

小林 茂 (九州大学)

日本の文化の独自性について考える場合、さまざまな視角がある。生活に直結する生業や食文化をてがかりにする方法は、そのもっとも重要なものと言ってよいであろう。柳田国男らによる稲作文化論から最近の照葉樹林文化論まで、多くの成果があがっている。ここでは、そうした視点にたちながらも、従来正面からほとんどあつかわれていない牧畜という生業に関係する日本の文化に注目してみよう。日本には本格的な牧畜的生業はなく、したがって日本人は牧畜民族ではないと言われている。この指摘の内容にさらにふかくたちいり、日本人の家畜のとりあつかい方、乳の利用の特色を、牧畜民といわれる人びととのそれと比較対照しつつ検討する。

② アジアと日本

川本 芳昭 (佐賀大学)

日本社会は閉鎖的であるといわれる。こうした日本人の島国性は近年、専門家以外の多くの人々によっても、克服さるべきものであると指摘されるようになったし、実際それはかなり打ち破られつつあるかにみえる。しかし、事柄の根本にまで降り立ってこの問題を考えるとき、事はそれ程楽観をゆるさないものがあると私には思われる。日本人は伝統的に自らの外の社会の人々の痛みとして認識することができない所があるが、それはこの閉鎖性と密接不離の関係にあるのではないか。古く時代を溯れば豊臣秀吉の朝鮮侵略、明治以降のアジア侵略、そして現在の経済侵略、教科書問題に示された対アジア認識の貧弱さ、アジア蔑視等はすべて他者の痛みを自己の痛みとして受けとり得えない、我々の意識と根本において結びついているのではないか。自分はその様なことはないという人々の大半もアジアと日本の意識の間にある大きな落差に全く気付いていない。今、我々は我々の人間性の根幹に係わる問題として真剣にこの問題を考えるべき時に至っていると思われる。

③ 日本人

——ユニークさの神話——

マーチン・ジョージ・カウイ（鹿児島大学）

東京帝国大学で日本語・アイヌ語を教えていた英国人の Basil Hall Chamberlain は、1912年に「新しい宗教の発明」という論文を書いた。その中で彼は《Mikado Worship》(御門崇拜)や《Japan Worship》(日本教?) という言葉を使って、紀元節から武士道まで、後の軍国主義の裏付けとなった「神話づくり」を鋭く批判している。

二度の世界大戦を経た73年後の現在でもなお、《Japan Worship》が盛んに行なわれている。「日本はユニークだ、特別だ」という考えに捉われ続けている。自らを賞讃し、優越感に浸るのである。政治家・新聞記者・学者の多くは、宗教的な確信で「日本はユニークだ」ということを信じ、あらゆる議論にそれを持ち込む。

このような風土において成長する若者は無意識のうちに、人類を「日本人」と「その他の者」との二つに分断してしまっていないだろうか。

この「信仰」の諸相を共に考えてみよう。

④ 日本における中国文化の受容

——宋詩の題画詩を中心として——

大野修作（鹿児島大学）

宋詩は日本の五山文学を中心に多くの影響を与えたが、それは入宋して帰来した者が主に僧籍であったことがその理由の一つとしてあげられるが、それだけでなく宋詩が持つ発想のユニークさにもあると思われる。なぜ宋詩がそうした特質を具えたかといえば、その最大の原因は、唐詩は叙情文学の頂点であり、同一の方法をもってしては唐詩を乗り越えられないという意識が宋の詩人たちの根庭にあったからであり、すぐれた詩人ほどそれに苦しめられた。本講義は、宋の代表詩人である蘇軾や黄庭堅のうち題画詩を中心に据えて、新しい発想を模索する姿と、それが日本にどのように受け入れられたかを見てゆきたい。

⑤ 西ドイツにおける市民文学の変容

——1960年以降——

政 所 利 忠 (九州工業大学)

1961年、西ドイツのドルトムント市に、炭鉱で働く抗夫たちを中心とする労働者作家集団・グループ61が生まれた。グループ61の活動は19世紀中葉からのドイツの労働者文学、プロレタリア文学の伝統に従ったものであったが、資本主義との対決、階級闘争という性格を次第に薄め、その発表する作品の内容は、庶民文学あるいは市民文学とでも呼ばれそうなものに変化してきたという一面を持っている。しかも過去において問われることのなかった文学的質の高さ、美学的評価もいわれるようになるとうとしている。その背景には60年代以降の技術・産業界の急速な進歩に伴う、労働界や労働者の質的变化があり、労働者と市民 (Bürger) との区別が判然としにくくなったということがある。この種の文学は、今後、どのような展開を見せるであろうか。

⑥ エネルギーと文明

柴 田 昇 (長崎大学)

力学におけるエネルギー概念

運動エネルギー、ポテンシャルエネルギーとエネルギー保存。

結合エネルギー

熱力学第一法則：熱と仕事の等価性、エネルギー保存則の拡張。

熱力学第二法則：不可逆変化（変化の方向性）とエントロピーの増大。仕事と熱との差異。

自然界の傾向（人間社会—文明社会—との相異）

自発性なし（慣性）。エネルギー極小、エントロピー極大へ向っての変化。

エネルギー、物質の消費

消費してもなくなるらない（保存則）。

消費＝変化→エントロピー増大。

エネルギー問題の一つの視点

石油は残り少ないか。

物理法則と文明

物理の進歩→科学技術の発展→工業化社会への寄与。

熱力学第二法則？

⑦ 生命科学の現状

——いわゆるバイオ・テクノロジーについて——

鈴木 明 郎 (熊本大学)

生物学は近年著しい発展をみせた学問の一つであると言われている。様々な生命現象の基本原理も明らかにされて来た。特に、神秘につつまれ、不可解なものと考えられていた遺伝子を我々が手中にして以来、その進歩は著しい。しかし、生命の起原・進化・発生・死など未だ解明されていない生命現象もまた多い。

そして、近年マスコミ等によっても遺伝子操作による新しい生物とか、クローン生物とかについての報道も多い。そこで、この講義では、バイオテクノロジーとして使われている生物学の原理・手法についてお話すると共に、その可能性と限界についても言及してみたい。

⑧ 世界の食糧と日本

刀 田 和 夫 (九州大学)

この地球上には、アフリカをはじめとして何億もの飢えた人々がいるが、わが国では人々は十分に食べることができ、ここには食糧不安の影は全く見られない。

しかし、日本国民の食べている食糧の約3割は輸入品であり、中でも穀物は7割近くを輸入に頼っている。

加えて昨今の日・米欧貿易摩擦問題から、オレンジ、牛肉等の市場開放が強く迫られ、こうした圧力は唯一の自給穀物である米にまで及ぼうとしている。

食は衣住とともに人間生活の基盤である。このような食の多くの部分を、自国民の手によって作り出すのではなく外国に依存することの利害得失を、世界の食糧貿易の動向ともからめ、様々な側面から検討してみたい。

○フォーラム 「日本の100年 ——21世紀への展望——」

『核問題と平和教育』

友 寄 友 造 (琉球大学)

現代は、核時代と言われ、核問題と平和に対する認識は益々重要なことになってきている。ユネスコは「軍縮教育は教育と報道に従事するすべての人びとの基本的義務である。これらの人びとは、軍拡競争、核兵器の存在、人類の生存を危うくし、政治的・経済的・文化的影響をもたらす核兵器使用の可能性などと関連する諸問題の広がり、重大性、緊急性に無知であることは許されない」（ユネスコ軍縮教育世界会議最終文書、1980年）と述べている。このような立場から現在琉球大学教養部で開設されている総合科目「核の科学」の授業概要を紹介しつつ次の講義内容としたい。

- (1) なぜ今「核問題」か
- (2) 核戦争と地球・人類
- (3) 核軍縮と平和教育
- (4) 平和教育の意味
- (5) 核問題と日本

第10回九州地区国立大学間合宿共同授業参考書一覧表（島原分校）

○講義担当教官指定参考書

教官	著者名・書名・価格等
小林茂	梅棹忠夫 著 「狩猟と遊牧の世界」 講談社学術文庫(24) 260円
川本芳修	本多勝一 編 「中国の旅」 朝日新聞社文庫 400円
大野修	吉川幸次郎 著 「人間詩話」 岩波新書 430円
政所利忠	ハウプトマン 著 「織工」 岩波文庫 400円
柴田明	梶田敦 著 「資源物理学入門」 N H K ブックス 700円
鈴木和	郎 著 「ブラジルから来た少年」 早川文庫 460円
刀田友	夫 著 「食糧問題ときみたち」 岩波ジュニア新書 530円
友寄友	造 著 「核廃絶は可能か」 岩波新書 430円

○推薦参考書

小林茂	中尾佐助 著 「料理の起源」 N H K ブックス 700円
川本芳修	小谷汪之 著 「歴史の方法について」 東大出版会UP選書(234) 980円
マーチン・ジョージ・カウイ	<i>Understanding the Japanese</i> , by Gregory Clark, KINSEIDŌ 1983.
政所利忠	<i>Japan's Modern Myth</i> , by R.A.Miller, WEATHERHILL, Tokyo, 1982.
刀田和	小林立多喜二 著 「蟹工船」 岩波あるいは角川文庫 400円
友寄友	篠原孝 著 「農的小日本主義の勤め」 柏書房 1,500円
	杉江栄一 著 「軍縮」平和への選択 新日本新書 580円

3. 第10回合宿共同授業を終えて

(1) 反省と展望

九重分校オーガナイザー 志 垣 嘉 夫 (九州大学)

夏休みの始まりは合宿共同授業からと言っても大袈裟でないほど、この授業開始が九州地区の国立大学学年暦に定着してから早十年になる。十年一昔と言うが、各大学の教官と学生が寝食を共にして授業に参加する形態を実施にこぎつけるまでには、先輩の先生方の多大のご苦労があったらうと思いをはせると同時に、十年も経過してみるとあれこれと改善・改革を施すべき問題点も少なくはないことが浮彫りにされてきたようである。マンネリ化した合宿共同授業に教官も学生もどっぷり漬かり始めたと言えようか。オーガナイザーとして自己反省的な所感を卒直に述べてみる。

まず、授業時間が過密ではなかったか。日中4コマ、夕食後1コマ、四泊五日の予定でしかも総合科目(九大の場合)2単位の取得を認定するとあれば致し方のないところであろうが、一方通行の授業形式であれば学生にとっては些か負担が重く、窮屈を強制したシステムと受けとられても異論のないところだろう。この一方通行を改善するために、フォーラムや討議形式の授業を時間割に組み入れてはいるが、メインテーマに対する教官のアプローチの方法が多様をきわめ、その上学生の予習の不充分も手伝って、卒直のところ噛み合うところが少なかったと言ったら言い過ぎか。時間割編成の問題に検討をあらたに加えると同時に、メインテーマに対する教官の側の入念な打ち合わせが是非とも必要であろう。

次に、学生の合宿共同授業に参加する姿勢あるいは意識を問題としたい。四泊五日の三食昼寝付、酒はふんだんに飲める、経費は八千五百円(疏大は別額)、の安直な風潮が推積してしまって、参加することだけに意義を求めて予習の義務を怠り、主体的な授業への対応を忘れさってしまった学生が多くなったことに大いなる淋しさを感じるのは私一人だけであろうか。夜の自由時間に酒を酌みかわし教官や仲間と語り合うことを非難するのではない。その点はすべて学生の自主的判断に委ねて、多少の羽目はずすことだってありうるし、それを一々規制しようなどは夢想だにしない。遺憾なのは、授業には殆んど参加しないで部屋で寝てばかりいる、アンケートを書かせればこれまた白紙に近い状態で提出する、はたまた合宿共同授業は酒飲みの方であると豪語して憚らない学生などの態度であって、かれらは合宿共同授業に参加する資格もなければ、学生たる資質にも欠けているときびしく批判したい。

さらに、大学生の合宿共同授業であるから微々細々にいたるまでオーガナイザーの方から学生の行

動を規制することはありえない。にもかかわらず、今回もまた幾度かにわたって生活補導にも類似した指導をあえて行なわなければならなかったことは誠に残念である。他人の就寝を妨げるほどの喧騒、酒の飲みすぎによる騒動など、若者たちの存在証明として分らぬ訳ではないが、主体はあくまでも「学び」であって「遊び」ではないことを肝にめいじておくべきである。この論理が逆転したときには、もはや合宿共同授業の存在基盤は喪失してしまうであろう。そうならないようにするためには、もう一度、各大学で合宿共同授業の主旨をよく踏まえて、つまびらかに参加学生にも理解を求める手だてを講じるべきではなからうか。

本年で十年目を迎えたこともあって、来夏は琉球大学が当番校として予定されている。これまで琉大生が遠路はるばる九州にやってくる。来年は、九州から沖縄に足を運んでみようと言う訳で、その意義は大きい。九州では九重と島原の両分校でそれぞれ80名の学生を受け入れていたが、来年は九州から160名の学生と琉大生40名の計200名を一同に集めての大規模な合宿共同授業となる公算が強い。琉球大学教養部のご苦労は大変であろうと思われるが、曲り角にきた合宿共同授業であるだけに、不遜な言い方になるけれども、来年度のオーガナイザーは今夏の授業と生活をつぶさに観覧されるべきではなかったかと思っている次第である。

ともあれ、第10回も、九重・島原両分校ともども、各大学のご協力のもと恙無く終了することができたことはオーガナイザーとして望外の喜びである。最後に、主管校たる九州大学としては当然であるのご意見もあろうが、煩雑な事務の整理を通して合宿共同授業の円滑な運営やその他諸々の領域にわたって協力を惜しまれなかった教務掛の山崎英一掛長と三浦洋事務官にオーガナイザーとして感謝の意を表することを諒とされたい。

島原分校オーガナイザー 小 澤 晃（鹿児島大学）

第10回の当番校の責務をまがりなりにも果たし終えてほっとしている。10回という節目を機に、次回からは制度の刷新が計られるとのことであるが、必要な改善を加えて一層の充実を期待したい。

過去9回の報告書を通読してみると、参加学生の「意識」の在り方と「質」に応じて、初期の昂揚、中期の危機、後期の建て直しといった具合に、比較的短い年月の間にかかなり激しい「雰囲気」の変遷がうかがえる。この中期からの「変質」には、単位認定の有無の他に、共通一次試験が影響していると率直に認めざるをえない気がする。

しかし、それならそれで、制度としての合宿授業も柔軟に対応するべきではなからうか。参加学生の意識の変化および「質」の変化と、教師側の期待値との間のズレがある種の^き^し^みを生ぜしめているとすれば、学生よりむしろ、固定観念的過剰期待に陥っている教師側にこそ、柔軟な意識変革が要

求されているのかもしれない。

合宿か授業か、などという不毛な議論はもう止めにしたい。合宿でありかつ授業である、という自明の出発点に立ち戻り、その上でプランを思い切って改造してはどうであろうか。そもそも「合宿の側面」は教師の徒らな介入などなくとも自ずと機能しているのである。問題は過密講義のもたらす「束縛」と「不消化」にあり、そのことが無益に合宿全体に悪影響を与えているのではないかという点なのである。

このことを考える上で、学生たちの感想文は示唆的である。彼等の多くがもっとも評価した、あるいは強く印象づけられた授業が、「講義についての討議」と「フォーラム」だという点に、もっと注目する必要があるだろう。言い方を変えれば、このことは、学生たちが、教師や仲間との「対話」と授業への「参加」を潜在的欲求としては持っているのだということの意味していると思われるのである。教養部の学生たちの心底にこの欲求が潜んでいることに、我々教師は改めて、そしてより積極的に留意する義務があるだろう。

例えば、講義を6つに減らし、(1)(2)(3)の講義については二日めの午後に、(4)(5)(6)の授業については三日目の午後に、それぞれ三時間ずつ討議の時間を設ける(途中で自由時間に切りかえてもよし)。学生は関心に応じて複数のグループを移動する自由をもつ。フォーラムは三日めの夜にもってくる。こんな案は不可能なのだろうか。フォーラムはテーマをしぼって発題者を一名とする。そして、予備知識を得させるために、これについてだけ参考図書を必読とし、他の講義については、今後の勉強のための参考図書の推薦というに留める。(大体、短期間にあれだけの参考書を読んでくると考えるのが過剰な期待だ)。以上のような改善で二つの授業形態を充実させ、少しなりとも合宿という授業を活性化することは可能ではないだろうか。

感想と私案を記しつつ、合宿授業の今後に更に期待したい。

(2) 参加講師による感想（九重分校）

三 善 英 毅（RKB報道部長）

唯一人の部外講師であった私の感想は、何よりもまず、こちらの方が勉強させてもらったということだろう。寝食を共にしながらの勉学は、印象深く新鮮なものであった。同様の感想は、学生側も抱いたに違いないと思う。何故なら、私の立場は、講師というよりは、学生の方に近かったと思うからだ。

就中、講義のあとの質疑が興味深かった。的をついた質問も少なくなかったが、意表をついた思いがけない疑問も率直に提出された。これは受講者が、特定の学部に限らず、文理・工・医など、全学部にちらばっていたせいもあったと考えられるが、それにしても、あまりにあどけない質問もないわけではなかった。学問の高度化、専門化は、学生に対しても早い段階から、それへの対応を迫る結果になっているのだろうが、全体として“一般教養の基礎”を欠くようなことになれば、文化全体の安定度を失う恐れも出てくるのではないかと感じさせるような雰囲気での討論もあった。すなわち、上記の意味でも、この種の学際的な合宿共同授業は有意義ありと考えられていると推察した次第である。その点では、講義の内容が、あまりに専門化・些末化するのとは、この場合あまり適当ではないのかも知れない。

解放された、気安げな学生達の姿に比べて、講師の先生方の、配慮の行き届いた対応ぶりが印象深かった。授業の質的展開をはかるため、事前に授業の進め方、討論のあり方を検討し、臨雇の同僚講師が、八百長質問を投じるという具合であった。日常の大学教師の苦心、工夫の程を垣間見る思いをした次第である。

さて、私自身にとっていえば、夜、車座になっての講師の諸先生方との酒席が、何よりの経験だった。肴はチクワとオカキ程度だったが、そこで交わされる会話こそは、最高のツマミでありご馳走であった。九大志垣教授のバーボンウィスキーを勝手にいただきながら、宮崎大宮田講師の地球砂漠化論をきき、枕を並べた夜の床で、九大安藤教授のマラー観を拝聴し、私自身、この合宿授業の講師としてではなく、一生徒として安眠したのであった。

岡山 繁 樹 (九州大学教養部)

“飴と鞭”というのは、ある学生の合宿授業の感想にあった言葉である。“飴”とは学生のコンパであり、“鞭”とは講義と討論である。どちらも、かなりハードなスケジュールであったと思う。それをなんとかこなした学生諸君の若さには、感心したり、あきれたりである。それもオーガナイズされた諸先生方と事務の方々のご尽力があればこそであろうが。私は、“飴”も“鞭”もほどほどにお付き合いさせていただき、“酒とバラの日々”とまではいかなかったが、おおいに楽しく過ごせた。

教官と学生の係わり合いは、“単位”というものを通してでしかありえないのかなと、ふと思うことがある(藪である)。そういう係わり合いは、“紛争?”などで学生と係わるのに比べれば有り難いことであるとも思う(躁である)。“おらあ教養部は嫌だ! 学部さ行って勉強するぞ!”と歌っていた学生がいたが、大部分の学生の思いであろう。教養部の魅力のなさの一因は、教官と学生の間に学問的な?対話がないことにもあるような気がする。学生の水準に合わせた対話を試みなければならないのに、単位を背景にした教官から学生への一方的な“善意”の押しつけがあるのかもしれない、と独りよがりな?反省してもいる。

それにしても、合宿授業へ参加できる学生の数が非常に限られているのは残念なことである。

吉川 和利 (九州大学)

この共同合宿授業に参加する学生諸君は教養課程に在籍する(あるいは単位を残す)者であるが、またそれぞれに志望・在籍する学科も併せもつ。教養部自体がそうであるように相互の専攻学科の特長を知り、相互に共通した基盤を見出そうとするにはこの上ない機会であるはずだ。我田引水だが、体力・スポーツ科学と「工学」・「医学」の関係、物理学・数学など「基礎科学」からみた体力・スポーツや生体の問題、「教育」・「哲学」・「心理学」的なスポーツへのアプローチ。

こうした討論を期待することは尚早なのだろうか。たとえメインテーマからはずれたとしても広く科学一般を論議することは、専門自体を深化させることと常日頃考えている。

* * *

山の天気、未経験の地状、空間の広がり、こうした特異な環境とその変化する過程に適切に身を処すことを私は一種の自己保全能力であるとみなしている。極論すれば、どしゃ降りの雨の中でいかにリーダーに従うか、仲間と協同して行動するか、これも一つの学習であり、登山というスポーツで求められ開発されていく能力である。班を編成し、そこに独自の行動と一定の規律を強いたのは学生諸

君に自発的な参加と協同の役割を求め、結果として満足感をより強固に、また自信すら高めていただくことを考えたからである。祖母・傾の峰々や雲仙を臨むことはできなかったが、いつかは九重の大地を踏んで全ての峰に足を伸ばしていただくきっかけはできたと思う。

* * *

「コミュニケーション」が話題となった。力学に「インピーダンス・マッチング」というのがある。「のれんに腕押し」、「歯がたたない」、この中間のどこかに力を十分に伝え、また受けとる臨界点があるはずだ。「指導」という面からは他の先生方に比べ、私の場合は「塩梅」に多少の自由度があるし、何よりも短時間で自信や満足感すら伝達できるのだから、相応の「手応え」は得ることができた。

* * *

合宿といえば急性アルコール中毒も含めた急病人への対処がつきものとなってしまった。意識朦朧とした同僚のそばでおろおろする者、意に介さずに「イッキ」に気炎をあげる者。これらへの対処については先生方の並々ならぬ御配慮があった。「そんなことは当然」とは決して思わないで欲しい。「そんなこと」の帳本人の責任はどこにあるのか。予後はどうなったのか、自分の大学にいる現在もやはり頭のスミにひっかかっている。

長瀬 慶来 (佐賀大学)

7月中旬、佐大生9人と共に暑さにあえぐ佐賀をあとに九重高原へと向かった。そこで行なわれる九州地区国立大学間合宿共同授業に参加し、各大学から参加の80名の学生諸君の前で講義をするというのが私に課せられた務めであった。「世界の中の日本一世紀末から21世紀へー」というメイン・テーマの下に各講師がそれぞれさまざまな角度から多面的なアプローチを行い、非常に有意義な研修であった。特に個々の講義のあと持たれた「講義についての討議」の時間は特に議論及び交流を深めるのに有効であった。ここでは私の担当した講義についての討議の内容を紹介することで報告にかえたい。討議は、講義内容についての質疑応答から自由討議へと移っていったが、主な topic だけあげてみても、

- ① 世界共通語 (人工言語: エスペラント等 VS 自然言語: 英語) の問題
- ② 音声合成
 - Ⓐ 絵や写真から声の復元 (モナリザ等)
 - Ⓑ 話すおもちゃ
 - Ⓒ コンピューター音声入力
- ③ 声紋と犯罪捜査
- ④ 声のキー (ソプラノ) と発音の識別

⑤ 方言の問題

⑥ 外国語学習のメディアの問題

以上のように topic は多岐にわたり、90分という枠が短かすぎると思われる程であった。10人前後の学生とひざをつき合わせて話すという状況が幸いしたのかもしれない。80人全員を前に講義を行なう他に、こういった小人数の議論の場を与えられたことは幸せであった。

最後に九重での五日間を有意義なものとする事ができたことに対し、運営に尽力された方々、特に当番校のスタッフ諸氏の御努力に深く感謝する次第である。

川 野 田実夫 (大分大学)

私は教育学部化学教室に所属し、日頃、化学実験とか、分析化学、あるいは化学実験法といったいわゆる「専門科目」の講義を担当しています。一般教育の経験は昨年度(昭和59年度)に僅か2単位分を講義したのみです。

今回、合宿共同授業に参加したのも、ただ大分大学のシステムの中で講義担当者に指名されて何んとなく参加したに過ぎませんでした。

梅雨明け間近の7月12日に暑苦しい大分市を出発し、高原の九重分校に来てみると、朝食から御飯のおかわりができる「別世界」でした。「別世界」は文字通りで、日常とは違った観点で学生や私自身を見つめなおす機会を与えてくれました。

オリエンテーション、講義と計画が進められていくうちに、私の所属する研究室の学生を思い出し「あの学生や、この学生が参加しておればなあー」などと思ったものです。

試験管の中に2種の試薬を加えて、化学反応を起こさせて、発生する気体の種類を同定したり、重量の変化を測定するなどを行って、試験管の中の化学変化が複数の変化であることを確認する実験を行ったことがあります。黒板にその複数の化学反応式を列記した時です。学生の一人から「先生、結局どの反応式を覚えればよいのですか？」との質問を受けました。これに近い経験はいくつかありますが、そんな学生達を、この共同授業に参加させたかったのです。

「九重で考えたこと」は一般教育に関することでした。大分大学では、専任教員と兼任教員によって一般教育がなされています。学部や教室によって事情は異なると思いますが、私の場合一般教育についてほとんど無関心でした。従って合宿共同授業の存在すら知らず、ましてその意義についてなど考えたこともありませんでした。前に述べた学生の質問などを例に挙げて、共通一次試験と絡ませて現在の学生を論評した揚句に、「一般教育の充実」などと大口をたたいたことのある人間が、この九重分校を知らなかったのです。

初日の分校長の挨拶で、合宿共同授業の意義と歴史を知ることができました。今回のテーマや運営のあり方、あるいは、私自身の講義についてなどに様々な感想がありますが、何よりも大切な事は、合宿共同授業が、一般教育の関係者だけによって運営されるのではなく、広く大学人全体のものにされて、「大学教育」として位置づけられる事だと思います。大学間の単位の互換取得の目標もさることながら、各大学でも総合科目の整備、拡充に、合宿共同授業の歴史と実績が寄与する事を強く希望します。

私にとって九重分校は「大学教室の再教育の場」であったようです。

加藤好文（大分大学）

はじめに、4泊5日の合宿共同授業は私自身にとっても実に有意義で貴重な体験でありました。このような企画に参加させて頂いたことを改めて感謝申し上げます。学生諸君も日頃のキャンパス内における単調な生活から脱け出し、豊かな自然の中で潑刺とした姿を見せてくれました。あれだけのハードスケジュールを消化したのですから、この思い出は一生彼らの心に残ることでしょう。

しかし、各講師の専門分野を生かした一回限りの講義を十分にこなすことは中々容易ではありません。深夜暗躍する学生たちにとってはなおさらのことです。従って、“自由討議”の時間や“自由時間”の有効な活用をさらに指導し、消灯就寝を徹底することが必要になります。また一つには、各講義毎に質問時間を設けるのも有効な手段ではないでしょうか。講義内容が彼らの脳裏に鮮明な時に質疑応答を行えば、一層の理解が得られるものと思います。それ以上に、彼らの授業への実質的な参加を促し、緊張感を生み出すことにも繋がります。そしてその延長線上に“講義についての討議”を据えれば、両者がスムーズに連繋でき、その効果は倍加されることと思います。しかしいずれにしても、指定参考書の必読がその大前提となります。最も早い段階で学生たちにそのリストを提示し、準備させることが重要です。

最後に、私が担当した“講義についての討議II”の感想を述べて終りにします。まず、私が講義で言い足りなかった点を補足説明した後、学生諸君とアメリカ文学全般さらに日本文学に関して、その読後感を中心に自由に語り合いました。中でも、彼らはその主人公たちの末路（未来）に大に関心を寄せ、自らの想像力によってそれを補ってくれました。それは実に楽しく有意義な一時でした。彼らの感性のみずみずしさに心打たれたと同時に、頼もしくも感じたものでした。

ロバート・J・アダムス（宮崎医科大学）

合宿共同授業に参加させていただいて、非常によかったと思う。実は参加するのは四回目であった。今年は三年ぶり、その三年間の内、自分の考え方と学生に対しての期待が少しずつ変わって来た。と言うのは、現代の学生の頭は爆発するほど知識で詰め込まれている。けれども、その知識の使い方は十分に教えられていない。入学試験を合格する為に使ったインフォメーションの今後の使うべき方法は、残念ながら、受験勉強の時、全然触れてない。

この世の中の知識の量がますます多くなるので、学生が学ぶべきことが年々増えている。学んでいる情報の使い道を考える暇は、なおさら少なくなる。

合宿共同授業はちょうどよい機会、その今まで習ったことの意味を他の大学の学生と一緒にゆっくりと考えるチャンスになる。広いテーマで、あらゆる立場から、現代社会の主な問題を考える機会は、たいていの大学の中で、そう多くではない。合宿共同授業の五日間の内に、もちろん、新しい知識を習うことが出来るが、その知識と前に覚えて来た知識を今まで使用していなかった枠を使って、考えたり、討議したりするのは合宿共同授業の特徴である。

十人の先生たちは、それぞれの専門の立場からメインテーマの枠内で講義をしながら、現代社会のいろいろな問題を上げた。問題をよりはっきり説明した講義は、よりよい成果があったと思う。日本では、学生は大学を卒業するまで社会人にならないが、18才で車の免許を取れるし、20才で選挙に投票も出来るので、事実上、学生は社会人である。

自分で判断しなければならない問題について講義を聞いて、その晩、先生と一緒にその問題を討議しながら、自分一人で知識を使って、活動をするべきである、と学生が分るようになる。今年の合宿共同授業でそれを理解して来た学生が多かったと思う。それは本当の教育である。

高谷紀夫（鹿児島大学）

どこからともなく回ってくるアルコール類、主催者側の気苦労も何処吹く風の毎夜の酒宴、刺激のかつ挑発的な言葉のやりとり、芸人根性のパフォーマンス…………と合宿の記憶は断片的ながらいくつかの具体的な場面と共によみがえってくる。楽しんだのは学生達だけではないことは確かだ。自分自身にとっても有意義な日々であったことは疑いない。

ここでは合宿のいくつかの場面の中から私自身が担当したフォーラムをとりあげその雑感を綴ることとする。

この度のフォーラムでは「異なるもの」の認識が主題となった。「異なるもの」は「身近なるもの」「内なるもの」にも「外なるもの」にも発見できる。そしてその認識の主体と客体の間に位置するのがコミュニケーションというわけである。だが、内容の刺激性にもかかわらずそれぞれの講義に比べてフォーラムの印象が薄い。学生達の反応も同様だったように思う。その理由としてはどんなことが考えられるだろうか。

ひとつはメイン・テーマの問題。はたして学生の関心を喚起するほど身近な設定であったかどうか。学生の側に討論の主導を与える工夫はなかったものか。勿論テーマを身近まで引き寄せる準備を怠った学生側の姿勢を問うことも大切であろう。だが現状のままでは教官と学生との質疑応答に終始してしまうのもやむをえないような気がする。

ではどうしたらよいか。それは準備段階でのやり方ひとつにかかっているように思われる。たとえばテーマの設定において方向性のみ指示してテーマ自体は合宿以前に各大学で候補を決めさせる。その際中心になってフォーラムを動かす担当校を決めておき、各大学提出のテーマから統一テーマにまとめさせておくのも一考であろう。また今後もフォーラムを合宿授業の中心に据えるなら、フォーラムの変革と並行して他の講義のやり方についても再考が必要ではないだろうか。以上述べた点は司会者の先生の巧みな舵取りにもかかわらず学生の反応を引き出せるだけの論点の集約に至らなかったフォーラム基調発題者の反省でもある。

合宿中に受けた各講義は普段接することのない他分野のものであり、自分自身にとっても良い刺激となった。『異なるもの』の発見は身近から』の通りである。

デイビッド・フェイ（琉球大学）

合宿共同授業の講師の依頼を受けた時、合宿共同授業が一体どのように行われるのかさっぱり見当もつかず、せいぜい山中で一週間を過ごす機会という軽い期待感しか持たなかった。ところが、ふり返ってみると合宿共同授業は私の日本経験の中でも最も楽しく、得るところの多い経験の一つでした。自分の専門分野を離れ、他の専門分野の学者と意見を交わし、時を分かち合う絶好の機会であり、またなごやかな雰囲気の中で学生諸君と何らこだわることなく自由に語り合う絶好の機会でありました。外国人である私にとっては、日本人の集団での働きぶりや遊び方をこれ程親しく経験できたことは大変貴重な一週間でした。恐らく最大の驚きは学生諸君が自分の意見に確固とした信念を持っていて、その主張も極めて率直であったことでありました。最大の失望は、合宿授業の日程が短かったことです。更に一週間続けても長過ぎなかったであります。

(3) 参加講師による感想（島原分校）

大野修作（鹿児島大学）

当合宿共同授業に参加してきわめて有意義であったと思われる。私自身は教官という立場にあったが、学生と日常生活を共にすることで、現在の学生は何を考え、どのように行動するかを身近に知ることができ、自分との落差を痛感しつつも、新しい刺激となって収穫した部分の方が多い。この経験は今後の授業のあり方に多く影響してくるであろう。久しぶりに長距離の登山をしたことも、良い体の運動になった。また学生にすれば、他大学生との交流が深まり、より広い視野の中でのものを考える良い機会になったはずである。合宿の解散間際に学生達が互いに住所を知らせあっている姿は美しい。こうした機会を提供するだけでも当授業は貴重であるといえる。今後はこれをより有効にし、合宿中の授業を円滑にすすめるためにも、各大学における単位認定には前向きにとりくんで欲しいと希望する。

以下二三細かな点で気がついたことは、第一日目のオリエンテーション後の夜の講義は遠方から来る者には疲れがでるのでやめてもよいのではないか。全体のスケジュールは一分の隙もないほど良く考えられているが、少し息抜きがあってもよいと思われる。また島原の場合、入浴時間が限られており、疲れを取る暇が無い。六時から九時ぐらいまで開放してよいのではないか。

鈴木明郎（熊本大学）

この合宿共同授業に参加するのは今回が三度目になりますが、前回は7年程前になるので、少し緊張し、期待もしてでかけました。今、この共同授業の感想はと聞かれると、疲れたという言葉につきます。感想の詳細はさておき、先ず今回の島原での共同授業の担当校として、大変苦労された鹿児島大学の教職員の方々に感謝し、お礼申し上げたいと思います。

疲れたというのが実感だと申しましたが、今回特にそう感じたのは矢張り年のせいで、前回はそう感じなかったようにおもいます。私は後半だけでしたが、それでも毎晩12時過ぎてからの睡眠は相当にできました。全コースに参加された方々の疲れは大変だったろうと同情する次第です。それだけに学生諸君のタフぶりには改めて感心した次第です。それと同時に、随分学生諸君が変わったと思いました。特に、最後の夜の交流会での様変わりには正直驚きました。夜遅くまで騒いだり、酒盛をしたり

といった行為自体には変化はないのですが、その表現の仕方と言うか、一人一人の言動には、少なからず驚嘆するものがありました。ショー性、観衆を喜ばせるサービス精神、悪く考えれば少しでも他人と異なる事を示そうとする自己顕示性、善くいえば優しさ。しかし、私には疎外されまいとする悲しい努力のようにも思えました。本当の意味での個性とは何だろうとも考えさせられた次第です。

共同授業の私にとっての最大の楽しみは、他の先生方の講義であり、他大学の先生方との取りとめのない話し合いです。分野の異なる専門の講義を100分間聞くのは久しぶりの事で少々疲れもしますが、色々学ぶことが多く、学生に戻ったような一瞬の若さを感じ自己満足もしました。学生にとってだけではなく、私共にとっても意味がありそうに思えました。

最後にこの共同授業に一言、前の時にもそう書いたような気がするのですが、余裕が欲しい。密度のこゆい、専門的な講義を睡眠不足の頭に入れるのは若い学生諸君にとってもかなりしんどい事と思います。半日か一日何もない時間があればと考えます。ゆっくり山歩きする人、スポーツする人、読書する人、お互いに議論する人、人生を語り合う人たち。単位のこともあって講義数を削ることが困難であれば、一日延長するもよし、何か工夫が欲しいと思います。10回目を終わって、特にそう感じています。

櫻 田 一 之 (熊本大学)

これまで、技術系単科大学の学部で在職し教養部の1、2年生と接する機会の少なかった私にとっては、今回の合宿共同授業は貴重な体験でした。また、他大学の先生方と意見の交換を行なうことができ、しかも、講義では自分の知らない分野の話を書くことができ興味をそそられたのも大きな収穫でした。その意味では、本合宿に参加できる機会が与えられたことに感謝しています。

すでに10回を数えているということで、授業内容、日程なども過去の経験に基づいたものと思われませんが、教養部に赴任して1年数ヶ月しか経たない私および合宿終了当日大学に帰校後約2時間に互って行なった参加学生とのミーティングで出た意見も合わせて2、3の意見を書きたいと思います。講義は楽しくなった。特にその後の討論は先生と直接討論することができ良かったが、3日目の「講義についての討論II」の時間は短か過ぎたようで日程表通りの時間は必要とした。フォーラムについては位置付けがはっきりしてなく、その場で提供された話題について討論するのなら2つのテーマは多すぎるし、また、行なわれた全講義の総括として行なうのなら講義の1番最後に(3日目)行なった方が良かった。登山は、ただ黙々と登るだけで、途中で景色を眺めることもできない(コース的に不可能)し、鳩穴での昼食は狭過ぎた感じがします。むしろ島原の土地柄が分かるような場所かセンターにある施設を利用してのスポーツ大会をした方が良かったように思われます。以上、今後の

参考になればと思います。

最後に、学生について私が感じた事を書きます。学生諸君は気遣い（思いやりあるいは遠慮）が過ぎるのか、他の学生に何かを強いることを極端に避けていると感じました（もっとも一気飲みの強要とは矛盾しますが）。音感は鋭く、寸劇などのうまさなどには、感心しましたが、行なうのはいつも特定の人で、しかも、同じことを何度も繰り返しています。やれない人は一気飲みを行ない、大声で所属、姓名を名乗って代わりとしている。やる人と見る人が区別されていたように思われます。全員で踊ったり、歌ったりすることを他人に強いることに抵抗を感じる（彼らの思いやり）のか、あるいはそうした形でのリーダーシップを取れる者が居ないということかもしれません。多分合宿に参加した学生のほとんどは友情を高めるためにもいっしょに歌ったりしたかったのだと思います。歌や踊りに参加したいが、そのきっかけが掴めない、あるいは、歌を知らない。つまり、参加の方法が分からなかったのだと思う。そこにリーダーの必要性を感じます。今回、鹿児島大と佐賀大の数人のリーダーシップには感心しましたが、見る、聞くの側の人を歌う、やる側に引っ張ることは遠慮があったようです。歌えない人を歌えるようにするには誰かが歌唱指導をしなければならない。そうしたことが強要になるとは私には思われませんが、そうした意味でのリーダーシップ性が必要なのではないか。今後、懇親会では島原の自然の中でキャンプファイヤーを囲んで全員で（もちろん教官も一緒に）歌を歌い、踊りを踊ることにした方が良くと思う。教官側（私個人？）の反省としてももう少し学生と話すべきではなかったか。学生もそれを求めていたように思われる。最後の晩に短時間ではあったが話し合えて良かったと思っています。

柴 田 昇（長崎大学）

合宿共同授業に参加して、第一に感じたことは、オーガナイザーを中心に当番大学の教官・事務官の御苦労が大変だということ。しかも合宿での日常茶飯事にまで、細かく気くばりしておられたようで、大学生ならば、もっと主体的・自主的に運営して、教職員の手をわずらわせることを少なくできないかと思いました。

設定されたメインテーマにそって、講義等のスケジュールを決めることも、オーガナイザーにとって大変な仕事だと思います。実質2日半の間に、フォーラム形式も含めて9コマの講義が設定されています。過密なスケジュールになるのは、2単位を認定できる授業としていたし方ないことだと聞きました。講義は各大学から参加した多彩な教室によって行われるので、講義題目やその内容が多岐にわたっているのも一つの特徴だと思います。しかし、この特徴は、講義題目が分散して焦点がぼけ、学生の頭脳の回転の効率を悪くすることにつながるおそれもあります。この点を多少でも改善するた

め、フォーラム形式を含めた講義全体の半数は、同一大学の教官（例えば当番校の）が担当する、ということを試みたらと思いました。そうすることによって、教官相互の事前の連絡・協議が容易になり、講義内容を少しまとまりあるものにすることが可能になるかもしれません。

今回の合宿授業での一つの楽しみ？は、教官控室に於ける教官相互の懇親・討議でした。話題は最近の学生の気質等について、教養部をめぐる状況についての情報の外、各教官の専門に関するものもありました。専門を全く異にする教官間の議論は、教養部以外では困難なこと。教養部の特色が生かされた教官控室の雰囲気でした。

合宿共同授業については、前回までの参加教官から種々お話を聞いていました。単位を認定しない長崎大学からの参加学生は、0名になるのではないかと予想していましたが、教務係の努力？によって、3名の女子学生が参加しました。合宿授業終了後、単位認定問題について意見を聞いてみましたが、私が驚く程、単位認定問題に拘泥していませんでした。単位なしを前提に参加しているのですから、当然かもしれませんが、単位を取ることのみを目的として参加した学生達の、合宿授業における態度・対応に対する批判も含まれているような発言もありました。

政 所 利 忠（九州工業大学）

この授業に参加するのは、学生にしても、教官にしても、ほとんどが一回限りで、個人としての経験の積み重ねはないという事実をもっと認識しておきたかった。私の場合、参加している学生の実情にもうとかったし、参加のホンネも知らなかった。「メインテーマ」に合わせて、自分の専門領域から講義を準備するにしても、学生のホンネを知っていたら、講義の素材の選定、動機づけ、気脈の通じ合いをはかるうえで、もう少し異なった対処が可能ではなかったかと思う。10人の教官による寄せ集めの授業内容からして、学生はどうしても受け身の姿勢になりがちであった。しかし、せっかく参加したのだから何かを得ようという姿勢は充分にうかがわれた。「大学間の交流、寝食を共にする研修」というタテマエはそれなりに生かされたと思っている。

授業が積極的に展開されるよう、学生も教官も、指定図書八冊を前もって読むことが要求される。ところが各大学で学生の参加者が決まり、主管校を通して指定図書リストが配布されるのが6月10日ごろ。各人が本屋に注文し、入手できるのは手際よく進んで6月下旬。授業初日の7月12日までに読了するのはとても無理であった。受講のための準備期間が短いのは、主管校・当番校の努力にも拘らず、各大学の年間行事との関係で、解決しにくい悩みときいている。授業担当者をもっと早く決め指定図書リストも早めに作製し、一括購入の方法はないものだろうか。

文部省の島原共同研修センターは緑に囲まれた高台にあって、静かな環境にある。しかし、学生・

教職員合計 100 人が宿泊するには狭すぎる。教官も六畳間に 4 人押し込まれざるをえなかった。授業への参加が単位認定に結びつく大学が大部分であるが、そうでない大学もあり、共同授業としての雰囲気づくりのためにも、学生のホンネに基づいた意欲昂揚のためにも、すべての大学が単位認定の足並を揃える方が望ましいと感じた。

小 林 茂 (九州大学)

感想としてまず言えるのは、思いのほか楽しかったということである。昨年参加されたある教官から出発前に聞いたのは、最近の共同合宿授業に参加する学生諸君はマナーがわるく、深夜までうるさいうえ、討論もお粗末で、彼らはこの機会を生かしていないということであった。今回もたしかにそのとおりに思われることもあったが、それなりに学生諸君は行動していたし、討論と言えるようなものはできなかったにせよ、それをおこなうには何が不足しているかはっきりしてきたように思う。とくに楽しかったのは、九州地区の他大学の先生方と講義の内容・学生諸君の発言や態度、さらには各教養部の現状を話題にしてゆっくり話すことができたという点である。シニアから若手まで、多様な領域にわたる研究者とのこうしたかたちでの出会いはすくなく、貴重な機会であったと思う。

つぎに感じたのは、スケジュールの過密さである。とくにはじめは、授業・討論がつづき、食事や入浴がゆっくりできないように思われた。もちろん、授業時間数や期間のことを考えると、これ以外の日程はほとんど不可能である。というより、おわってから反省すれば、たいへんよくできたスケジュールだと思う。しかし、これになれるまで、ややしんどかったという思いはこのころ。

もうひとつ書いておきたいのは、討論に際しての学生諸君の発言のしかたについてである。テーマが大きすぎ、それにどうとりくむか自分の立場を示すのはたいへんむずかしいことと思うが、「自分は十分に勉強していないので、以下の発言には問題があるかも知れないが……」という類のまえおきがつく場合が多かった。この種の予防線をはることは私もしばしばする。その点で学生諸君だけをせめることはできないが、こうしたまえおきつきの発言が多くては議論が発展しにくい。自分の立場をまず安全にしておくという配慮がつよすぎるように思われた。

この点もふくめ、教官と学生の間にいわれる「世代ギャップ」のあることがしばしば感じられた。教官・学生という立場のちがいもあるが、やはり育った時代のちがいは大きいように思う。しかしそれにもかかわらず、若者（学生）が大人（教官）をやっつけるという構図は討論中ほとんどみることではなかった。これも「世代ギャップ」のあらわれのひとつと考えてよいのだろうか、と思ったりしている。

ところで、島原分校に私も参加することになったのは、合宿授業のオーガナイザーの一人、志垣教

官（九大）からのお誘いもあるが、個人的なやや「不純」な動機も関与している。昨年来「島原大変」の研究にとりこんでおり、この機会を利用してみるのも悪くはないと思っていたのである。「島原大変」とは寛政4（1792）年におこった大災害で、普賢岳の噴火にくわえ島原市街背後の山がくずれ、その南半部を潰滅させるだけでなく、さらに海に流入した土砂により津波が発生し、熊本県側もふくめ有明海沿岸に大きな被害をもたらした。津波被害のひどかった長洲から有明海をわたり、普賢岳にも登れ、またすこし時間をいただいて新焼溶岩などもあらたに見ることができたのも楽しいことであった。なお帰って調べたところでは、研修所のある礫石原では、当時大量の地下水が流出したようである。長崎大の柴田先生から、このあたりでは地下水の流れる音がきこえるという話をうかがったが大きな地震に際し、これが地表にあらわれたわけである。

4. 学生の評価

(1) 合宿共同授業に対する参加学生のアンケート回答 (最終日実施)

	九重分校	島原分校
1. この共同授業に参加することを決めたきっかけは何ですか。		
(1) 自分から進んで参加した。	65	69
(2) 友人(たち)にすすめられて参加した。	9	8
(3) 大学(教官・事務官)にすすめられて参加した。	3	3
(4) 記入なし	1	0
	<hr/>	<hr/>
	78	80
2. この共同授業にどの程度期待していましたか。		
(1) 非常に期待していた。	13	2
(2) かなり期待していた。	21	30
(3) ある程度期待していた。	33	35
(4) あまり期待していなかった。	9	13
(5) 記入なし	2	0
	<hr/>	<hr/>
	78	80
3. この共同授業を終ろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。		
(1) 非常に満足している。	19	17
(2) かなり満足している。	48	56
(3) やや不満である。	10	7
(4) 全く不満足だ。	0	0
(5) 記入なし	1	0
	<hr/>	<hr/>
	78	80

(2) 参加学生の感想

① 九重分校

〔琉球大・法文・女・20歳〕

大学生というのは名ばかりで、中身は中学生以下だな、とつくづく思いました。私自身、大学生としていたらない部分はたくさんありますが、全体的に、人が共同で生活していく上で必要最低限のことがなされていないのに驚き、落たんいたしました。大学に入る「知識」を身につけても「人間」として身につけるべきものはもっていないように思えました。また、いかに他府県の人が沖縄のことをバカにし、何も知らないか、わかりました。

〔宮崎大・教育・女・18歳〕

私が参加した動機は、まず他大学の先生方がどのように講義を行っておられるかが知りたかったし九州の各大学から集まってこられた人々が、どのような考え方をしていらっしゃるかはこの目で確かめたかったからです。そして、他大学の学生さんと生活することで、輪がひろがることも大変期待しました。はじめは（私の）大学からくる人数が少なかったので、不安ばかりでしたが、ここについてと同時に不安はかき消され、私がここで学びとりたかったこと、確かめたかったことを十分に満足させる事ができたと思います。さすがに、宮大では少し望めないような他大学の皆さんの意欲や積極的な意見を、まのあたりにし、耳にすることができて、私自身、入学時の心を取りもどすことができました。

〔大分大・工・男・18歳〕

講義を聞くことによって、自分の知識がいかに浅く、片寄っているか思い知らされたし、自由時間に他大学の人たちと交流することによって、他の大学も自分たちの大学と同じなんだと感じ、急に身近に感じる事ができた。普通、学校で聞けないような特殊な講義も聞けて、新しく興味のわいてきたものもあったし、やはりそれだけでも有意義だったと思う。

〔佐賀大・理工・男・19歳〕

教官もなかなか楽しい所がある人間であるが、また、教官のほかの学生とは違う問題意識のもち方には感動した。人間関係では、同じ学内はもとより、他大学との交流も多く、大変面白いものだった。九州内とはいえ、まだまだ未知の場所が多く、そんな中で、その地にあの4泊5日の寝食を共にした

仲間がいると思うと、たいへん心強いものに思えてくる。

〔九州芸工大・芸術工・男・19歳〕

いろんなことを学び、いろんなことを感じ、いろんなことを身につけたようです。

その他——アメリカの人とお話できたこと、中国の人とお話できたこと。思わず人間がふたまわりほど大きくなったようです。

〔九州大・理・女・20歳〕

九大教養部で1年半すごし、いざ本学だと言うことで、これからは自分の専門の科目ばかりを勉強しようとかちょうど意気こんでいた矢先だった。が、私は今回の共同授業を通じて次のように思った。専門の科目を勉強するからこそ、それ以外の学問もいっしょうけんめいやらなければいけないのではないか。どちらかと言えば私にとっての教養部はこれからのような気がする。さらに幅広い知識と教養を身につけることが必要で、今の私はまだ何も知らない何も見ていない。特に各国の文化や歴史はよく学ばなければいけないと思った。そういうコミュニケーションがしたい。

〔九州大・農・男・19歳〕

この共同授業を通じて、各大学の人達と知り合いになれたことは本当によかったと思います。また日ごろはあまり話すことのない先生方、特に他校の先生方と真のコミュニケーションをとれたことは本当に自分にとってプラスになることが多かったように思えます。本当の講義というものは学校に帰って行なわれるような、知識の切りうりのようなものではなく、心と心の通じあった、お互いの気持ちや考えというものを交換し合うといった姿であるべきだと思います。その点この授業はこのことを十分に満足させてくれるものでした。最後に気になったことですが、講義のスケジュールが過密すぎたように感じました。1日中90分の講義の後30分の休けいというパターンははっきり言ってつかれました。講義の間にレクリエーションなどを入れて気分転換などをすればどうでしょうか。

② 島原分校

〔九州大・法・男・20歳〕

共同授業全般を通じて、1つの大きな収穫は、自分がこれから自分達の力で人として生きていくためのさまざまな事から、問題を真に自分の問題としてとらえることの重要性、そしてその背景に常に「いかにして生きてゆくか」ということを考え行動していくことを認識できたことであった。2つめは他大学の学生との会話によって交流が持たれたことの上に、相互の考え方等の交換など今の時代を生きてゆく若者として真面目な会話ができたと、そして4泊5日共に過ごして今は別れるのが名残りおいしい友情が芽生えたことであった。

〔九州工大・工・男・20歳〕

現代の大学生は個人の安心立命ということを最優先して考えるか、あるいはあまりにも無気力（受動的ニヒリズム）に陥っていると思われる。しかし、我々第三の波世代は社会においては今、発生して力を強めていく大波である。世紀末から21世紀に移行するのに最大の力となるのは我々である。15日の夜から16日の朝にかけて大部分の学生は起きて話していた。すぐに成果を期待することはできないが、この“合宿”が個々の人生において1つの重要なファクターになることは十分に予想される。九州地区国立大学間共同修学旅行バンザイ！

〔佐賀大・農・男・21歳〕

各大学の人たちと親しくなり、それぞれの人が、いろんな考えを持っており、自信に満ちあふれているような感じがした。21世紀を背負って生きていかなければならない世代となってしまった我々が、どういう状況にいるのかをあらためて知らされた。しかし、私自身としては、そんなに力まずに生きていきたい。

〔長崎大・工・女・18歳〕

最初、授業がきちっと埋まっているスケジュールを見たとき、ああ、きつそうだなと思いました。実際、授業は濃い内容の話が多く、授業だけで疲れてしまいました。その後、他大学生とゆっくりと話すことができたことは、私にとってとてもいい経験でした。他を知ってこそ己を改めて見ることができるのだと思います。自分の視野がいかに狭いか、他の考えをもっている人と話すことは、よい刺激となりました。私はまだ大学生になって半年、この半年間で私自身変わってきたと思いますが、この合宿を機に、また新しい自分が育ってきつつあるのを感じます。それがどういう風になるかわかり

ませんが、楽しみです。我が長大は、単位が取得できないとの理由で参加する学生が、非常に少ないことが残念に思えました。もっと多くの学生が参加して欲しいと思います。何か得ることがあるはずです。私は本当に参加してよかったと思います。

〔熊本大・薬・女・18歳〕

自分から進んで申し込んだのはいいけれど、7月に入って、やはり人よりも夏休みが短くなり、レポート等の提出をしなければいけないと思い、申し込みを後悔したことがありました。しかし、他の大学の人と、こういう風に一緒に学び、一緒に生活し、いろんな人のいろんな面を見るにつれ、大学に入って3ヶ月間考えに考えた「自分」というものについて、きざしがちらっと見えた様な気がします。内向的な私が、ふっきれた5日間でした。そして同時に、睡眠不足の5日間でした。本当にこのメンバーと会うことはないし、今になっては、あの時もっと話していればなんて思ったりもしています。いい経験をどうもありがとうございました。（留年したらまた来たいです……）

〔鹿児島大・理・女・19歳〕

日本という島だけでなく地球的規模で、今何が問題になっているか、またそれがいかに深刻であるかを考えるきっかけとなりました。今日の若者は楽観的すぎると言われていますが、その理由とするところの30%ぐらいは理解することになり、そして改めて、年齢の異なる者（例えば教官と我々など）の世の中に対する見方の違いを直接聞き知ることができ、世界の中の日本というよりも、人間の中の自分について、考えさせられました。もっと多くの教官の方の参加があればよかったと思います。

〔琉球大・医・女・19歳〕

大学生といたら遊んでばかりいるように思われているけど、やっぱり考えているところは考えているのだなあと感じました。討議やフォーラムの時などは、専門的なことを持ち出す人もいて、つくづく自分は勉強不足だと思いました。その上、先生方は「学生は情報不足だ」とおっしゃっていたのだから私はかなりひどい情報不足のようです。一部の学生を除けばあまりどこの学生も差はないのだなあと安心しました。

5. 参加者名簿

(1) 九重分校

① 教職員

	佐賀大学	鹿児島大学
	助教授 長瀬 慶来	講師 高谷 紀夫
九州大学	事務官 山田 文弘	事務官 前原 正俊
教養部長 立田 清朗	大分大学	琉球大学
教授 志垣 嘉夫	助教授 川野 田実夫	外国人教師 デイビット・W・フェイ
〃 安藤 延男	〃 加藤 好文	事務官 宮城 敏明
〃 岡山 繁樹	宮崎大学	〃 田場 盛順
助教授 吉川 和利	講師 宮田 泰雄	〃 伊集 盛仁
事務官 山崎 英一	宮崎医科大学	RKB毎日放送
〃 三浦 洋	外国人教師 ロバート・J・アダムス	報道部長 三善 英毅
九州芸術工科大学	事務官 吉永 和典	
助教授 大西 修也		

② 学生

	12 本田 美知子(医)	7 小野 雅史(芸工)
	13 川本 祥子(理)	8 桑野 康一(芸工)
九州大学 (18名)	14 三島 隆由(理)	9 八谷 和彦(芸工)
1 後藤 聡幸(農)	15 甲斐 誠司(法)	10 光富 好恵(芸工)
2 谷元 良二(法)	16 岩田 浩次(農)	11 福田 悦子(芸工)
3 近藤 和彦(農)	17 何 通暢	佐賀大学
4 谷口 浩一郎(農)	18 倪 小堅	1 内村 妃里(農)
5 北山 康(農)	九州芸術工科大学 (11名)	2 下津浦 宏(農)
6 須河内 敦(工)	1 江藤 祐一(芸工)	3 石松 哉壽子(教)
7 上村 義則(工)	2 桑原 豊(芸工)	4 副島 克己(理工)
8 石川 秀美(工)	3 沼川 滋彦(芸工)	5 森田 敦史(経)
9 小沢 昭夫(農)	4 伊東 香織(芸工)	6 山田 佳史(理工)
10 前原 典幸(工)	5 白石 敦(芸工)	7 首藤 昭則(理工)
11 山口 路子(文)	6 松下 裕幸(芸工)	8 日高 元太(経)

9 湯 淺 弘 美(教)	2 渡 邊 寛 子(農)	5 與 座 美都子(法文)
大 分 大 学 (12名)	3 櫛 間 嘉代子(教)	6 前 川 直 美(法文)
1 近 藤 潤一郎(経)	宮崎医科大学 (2名)	7 酒 井 いずみ(法文)
2 内 藤 智 治(経)	1 金 丸 秀 樹(医)	8 幸 喜 明 子(法文)
3 堀 慎 治(経)	2 池 永 昌 之(医)	9 當 山 貴 子(法文)
4 定 政 考 宏(経)	鹿 児 島 大 学 (5名)	10 濱 脇 きよみ(法文)
5 渡 辺 由 則(工)	1 前 田 元 子(教)	11 田 場 勝(理)
6 富 田 和 弘(工)	2 福 永 吉 子(理)	12 喜友名 正 也(医)
7 大 野 伸 和(工)	3 入 佐 耕 造(工)	13 杉 田 美 帆(医)
8 田 中 要 介(工)	4 馬 場 健 吉(歯)	14 中 村 珠 美(医)
9 中 野 宏 隆(工)	5 松 崎 憲 治(歯)	15 濱 川 牧 子(医)
10 財 前 浩 二(経)	琉 球 大 学 (20名)	16 宮 城 順 子(医)
11 五反田 仁(工)	1 與 儀 進(法文)	17 西之原 恵(法文)
12 末 松 義 明(工)	2 與那嶺 武(法文)	18 島 仲 由美子(法文)
宮 崎 大 学 (3名)	3 上江洲 聖 子(法文)	19 嘉 数 修(理)
1 志 田 史 子(農)	4 新 垣 賀 子(法文)	20 大 屋 睦 子(農)



(2) 島 原 分 校

① 教 職 員

	熊 本 大 学	佐 賀 大 学
	教 授 鈴 木 明 郎	事 務 官 丹 哲 也
九 州 大 学	助 教 授 櫻 田 一 之	琉 球 大 学
助 教 授 刀 田 和 夫	琉 球 大 学	事 務 官 比 嘉 光 治
〃 小 林 茂	講 師 友 寄 友 造	鹿 児 島 大 学
九 州 工 業 大 学	鹿 児 島 大 学	事 務 官 愛 甲 昭 雄
助 教 授 政 所 利 忠	教 養 部 長 荒 川 謙	〃 有 満 哲 郎
佐 賀 大 学	外 国 人 マーティン・ジ	〃 有 迫 嘉 三
助 教 授 川 本 芳 昭	教 師 ヨージ・カウイ	〃 永 田 久 晃
長 崎 大 学	助 教 授 大 野 修 作	〃 今 村 文 昭
教 授 柴 田 昇	〃 小 澤 晃	〃 満 田 昌 昭
		〃 高 附 正 美

② 学 生

	7 村上京太郎(理工)	鹿児島大学 (25名)
	8 野村智之(理工)	1 井手口浩之(医)
九州大学 (19名)	9 角屋竜雄(農)	2 古本敦子(法文)
1 今里洋二(農)	10 迫和昭(農)	3 森健一(法文)
2 松延真一(法)	長崎大学 (3名)	4 石川克予(教)
3 小山隆司(法)	1 伊東朝子(工)	5 大山雅子(理)
4 津野誠司(経)	2 徳澄千絵(工)	6 黒木里美(理)
5 福田樹美子(教)	3 岩永愛(教)	7 水野雅晴(理)
6 藤原敬士(教)	熊本大学 (11名)	8 坂井義則(理)
7 禰占孝之(工)	1 橋本浩基(工)	9 松岡孝敬(理)
8 宮永吉泰(工)	2 芥川貴美子(教)	10 溜功二郎(理)
9 徳光賢一(工)	3 上田恭子(教)	11 鳥井真之(理)
10 松岡俊治(工)	4 丸山隆之(理)	12 大田真也(工)
11 山西博幸(工)	5 伊木秀郎(理)	13 屋成敏己(工)
12 井上幹邦(工)	6 岩元貴久子(理)	14 蛭原貴典(工)
13 牛島達夫(工)	7 平川朝子(理)	15 大塚泰史(農)
14 寺岡行雄(農)	8 村上誠一(工)	16 赤崎浩志(農)
15 久連松香代(農)	9 進藤紀子(薬)	17 上園浩一(農)
16 近藤里美(農)	10 阿部裕子(薬)	18 清水克朗(農)
17 磯端裕康(農)	11 廣田雄一(医)	19 中拾石治彦(農)
18 斎藤浩之(農)	琉球大学 (10名)	20 鈴木史生(農)
19 堀由記子(薬)	1 太田守男(法文)	21 中原一寿(農)
九州工業大学 (2名)	2 知念りか子(法文)	22 佐藤和宏(水産)
1 池田秀彦(工)	3 久手堅憲史(医)	23 永野名李子(歯)
2 高見直宏(工)	4 太田真子(医)	24 蔭山恭一(歯)
佐賀大学 (10名)	5 境田智恵子(医)	25 白坂典之(歯)
1 中村登(農)	6 新城いづみ(医)	
2 小田康成(理工)	7 當眞晶子(医)	
3 藤田義則(理工)	8 中村千穂子(医)	
4 野中和弘(理工)	9 根本恵子(医)	
5 山田美和(理工)	10 保志門澄江(医)	
6 甲斐竜彦(理工)		

6. 付 録

第10回九州地区国立大学間合宿共同授業事務日程

年 月 日	事 項	内 容
59.11.8～9	合宿共同授業委員会	九州地区国立大学教養部長会議
11.19	企画委員会開催通知	
12.12	企画委員会開催	
12.21	講師推薦について通知	
60.2.1	合宿共同授業経費（予算要求）について通知	
3.12	講師決定について通知	
4月中旬	予算要求書の提出	
4.9	合宿共同授業実施委員会開催通知	
5.9	合宿共同授業実施委員会開催	
5.10	実施（学生募集等）について通知	
6.15	参加者名簿の提出締切	
7.12～16	実 施	